

# 攻撃性概念の細分化と形成過程

坂井 明子・山崎 勝之

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第49号抜刷）

## 攻撃性概念の細分化と形成過程

### Subclassification of Aggressiveness concept and development of Aggressiveness

坂井明子・山崎勝之\*

#### 攻撃性の概念と細分化

##### 1. フラストレーション時の行動と攻撃性の2分類

人は誰しも自分の権利が侵されたり、欲求が阻害されると怒りやフラストレーションを感じ、その解消をはかろうとする。その際、何らかの行動を示すのであるが、その行動例は多岐にわたる。相手を傷つけることなく冷静に自分の要求を行う主張的な行動をとる場合もあれば、回避や逃避的な行動をする場合も、攻撃的に行動する場合もある。また、ただ耐え続けるという行動もある。このような行動の中で、攻撃的な行動は、直接的に相手を傷つけ、適応上の問題状況を即時にもたらす可能性が高いことから、矯正すべき行動型であるとみなされてきた。

攻撃的行動型に関しては、その攻撃性を、反応（反作用）的攻撃（reactive aggression）と道具的攻撃（instrumental aggression）に大別することができる。反応的攻撃型をとる場合、外からの刺激に対して怒り感情を伴い、何らかの攻撃行動を示す。道具的攻撃型をとる場合は目的を達成するために何らかの攻撃行動を道具として使用し、怒り感情を伴わない場合も多い。これらの攻撃性を示す用語は研究者により異なり、反応的攻撃には、敵意的攻撃（hostile aggression）、反応的一衝動的怒り（reactive-impulsive anger）、無意図的攻撃（unintentional aggression）、感情的攻撃（affective aggression）など、道具的攻撃では、向行動（行為）

的攻撃（proactive aggression）、意図的攻撃（intentional aggression）、略奪的攻撃（predatory aggression）などの用語が用いられている。また、無視する、仲間はずれ、といった関係性攻撃（relational aggression）も広くは道具的攻撃に含め得るだろう（山崎，2002）。本論文では、それぞれの定義を直接的に反映し、用語からその内容を推測しやすいことから、反応的攻撃と道具的攻撃という用語を採用し、以下、この用語によって2つの攻撃性を区別する。

このように、現在の攻撃性研究では、単に攻撃性が高いか低いかの次元だけではなく、攻撃性を細分化して捉えることが研究の主流になりつつある。それは、そうすることで攻撃性とその他の要因との関連がはっきりしてくるからである。最近の発達心理学の分野でも攻撃性を大別する場合、上で述べた「反応的攻撃」対「道具的攻撃」という分け方が使われることが多い（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）。反応的攻撃はその生得性の高さが指摘されており、その発現は早く、例えば、難しい気質をもつとされる子どもは乳児期から親との関係で否定的な感情を強烈に表出し、怒りっぽく、その後、幼児期に攻撃行動を示しやすい（Bates, Bayles, Bennett, Ridge, & Brown, 1991）。また、他児との物の取り合いといった行動は乳児期から観察される。さらに、このタイプの攻撃性が問題となる時期も早い。この攻撃の具体的な例としては、悪口を言われたり、押されたりしたことにカッとたたく返すなどの反応が挙げられる。これに対して、道具的攻撃は社会的学習（Bandura, 1983）の結果獲得される

\*鳴門教育大学

とされており、家族や仲間の攻撃行動をモデリングしたり、たまたま用いた攻撃行動の結果自分の欲求が満たされる、といった強化、さらには、他者が攻撃行動を使うことにより目的を達成するのを目撃するという代理強化を受けることによりこの攻撃性を身に付けていくと考えられる。そのため、このタイプの攻撃行動が発現するのは比較的成長してからであると言われていた（Dodge & Coie, 1987）。その例としては、どうしてもそれで遊びたい遊具やおもちゃを他の子どもが使っていた場合に、無理矢理取り上げるような行動が挙げられる。

## 2. 反応的攻撃としての表出性攻撃と不表出性攻撃

攻撃誘発刺激によって怒りが喚起された場合、その怒りによる最初の反応（1次的反応）が直接的な行動として表に出るときと直接的には表には出ないときがあるだろう。このような反応的攻撃の細分化については山崎（2002）が以下のようにまとめている。

表に出る場合には反応的表出（表現）性攻撃（expressive aggression）、表に出ない場合には反応的不表出（表現）性攻撃（inexpressive aggression）などの用語が用いられているが、これらの用語も統一されおらず、表出性攻撃と同じ概念を顕在性攻撃（overt aggression）や外への敵意（outward hostility）と、不表出性攻撃と同じ概念を非顕在性攻撃（covert aggression）や内への敵意（inward hostility）と呼ぶこともある。また、怒り表現（anger expression）の分類として用いられる怒り表出（anger-out）は表出性攻撃と、怒り抑制（anger-in）は不表出性攻撃とほぼ同じ内容を示すと考えられる。

さらなる細分化も可能で、表出性攻撃については、言語的攻撃（verbal aggression）と身体的攻撃（physical aggression）が区別され得るだろう。言語や身体を使用した攻撃は道具的攻撃においてもみられるが、言語的攻撃、身体的攻撃と言えば、反応的表出性攻撃の範疇での用語を示している。

不表出性攻撃については、敵意（hostility）を中心として、重なりをもつ概念である恨み（resentment）

や猜疑心（suspicion）なども挙げられるが、敵意以外の概念には曖昧な部分が多く、測定に使用される尺度の構成概念的妥当性も十分に検討されていない。

他に、怒り表現の1つとしてよく扱われる怒り制御（anger-control）は、不表出性攻撃後の2次的な反応であることが多く、表出できない怒りを発散処理する反応と位置づけられる。このように考えると、怒り感情が喚起された後の2次的反応は多岐にわたり、不表出性攻撃から種々の表出性攻撃に至ることもあるだろう。いわゆる「キレル」という行動も、長期にわたる不表出性攻撃傾向が急に極端な表出性攻撃に至った場合で、不表出性攻撃時に怒り感情の処理能力が十分に発揮できなかった状況からきている。また、場合によっては表出性攻撃が不表出性攻撃に移行することもある。

概念の細分化の過程では、繰り返し実験を重ねることによる十分な証拠の蓄積が必要で（Antonovski, 1990）、これを怠ることによる研究の停滞が繰り返されてきた。現状での攻撃性研究における概念の細分化にも限界があり、1次的反応を対象にした場合、反応的攻撃と道具的攻撃の2大別から、反応的攻撃を表出性攻撃と不表出攻撃に分け、さらに分類を進めるならば、表出性攻撃として言語的攻撃、身体的攻撃、不表出性攻撃として敵意という区別までにとどめておくべきであろう。しかし、中学生や成人と比較すると小学児童の言語的攻撃と身体的攻撃の分化度は低く、この原因としては言語的攻撃の未発達と身体的攻撃への社会的抑制力の未発達等が原因になっていることが推測される（山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹, 2001）。また、この2分類の存在は、行動医学や健康心理学領域で多用されてきたBuss-Durkee Hostility Inventory（BDHI; Buss & Durkey, 1957）の因子分析でも確認されていることである（Bendig, 1962; Bushman, Cooper, & Lemke, 1991）。

これまでの発達分野において扱われてきた反応的攻撃や顕在性攻撃（Crick, 1997; Crick & Grotpeter, 1995）は、正確には、反応的表出性攻撃にあたると思われる。これに対して、反応的不表出性攻撃はこれまで発

達分野ではほとんど研究されてきておらず、この攻撃性は、主に健康領域で、反動的不表出性攻撃概念の一部である敵意 (hostility) として研究が盛んに行われてきた。例えば、成人の冠状動脈性心疾患と攻撃性に関する研究では、攻撃性において特に敵意や怒りを弁別することで初めて冠状動脈性心疾患との関連が明らかになっている。最近の健康領域での攻撃性研究の成果も、ただ攻撃性の高さについて健康との関連を調べるのではなく、攻撃性全体から敵意を取り出すことにより、攻撃性を細分化して調べるようになったからこそ得られたものである (例えば、Barefoot, Dahlstrom, & Williams, 1983)。また、児童期においては、敵意と抑うつとの間に大きな相関があることも分かっている (例えば、Quiggle, Garber, Panak, & Dodge, 1992; 仙谷, 2002)。そこで、子ども達の攻撃性を考えた場合、今後、発達心理学の分野でも反動的な不表出性攻撃を調べていくことが必要になる。

### 3. 道具的攻撃としての関係性攻撃

1. で取り上げた攻撃性の2つの下位概念 (反動的攻撃および道具的攻撃) は、Dodgeらの尺度 (Dodge & Coie, 1987) で測られることが多く、Poulin & Boivin (2000) によって、その2因子構造が確認されており、これらの概念の有用性は高く評価されている。ただ、実際の調査結果を見ると、両因子の相関は非常に高く、互いの弁別性が保証されているとは言い難い (例えば、Dodge & Coie, 1987で $r=.76$ ; Poulin & Boivin, 2000で $r=.82$ ; Price & Dodge, 1989で $r=.83$ ; Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oigny, 1998で $.71$ )。これは、1つには道具的攻撃に反動的な要素が含まれざるを得ないからであろう。Dodge & Coie (1987) の尺度には「身体的な力を使って優位に立とうとする (uses physical force to dominate)」等の表現が含まれ、「身体的な力」の部分が反動的攻撃との重なりをもたらすのだと考えられる。

また、攻撃性の発達的变化を考えた場合、小学生ぐらいの年齢段階では、攻撃性の様々な側面がまだうまく分離していないという可能性が考えられる。反動的

攻撃を4下位尺度に分けて測っている小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) 4尺度版を使った研究では、そのうちの「敵意」以外の「短気」、「身体的攻撃」、「言語的攻撃」の弁別が悪く (坂井・山崎・曾我・大芦・鳥井・大竹, 2000)、同じ質問紙を使って測る2尺度版 (2尺度版の「表出性攻撃」が4尺度版の「短気」「身体的攻撃」「言語的攻撃」に相当、「不表出性攻撃」が4尺度版の「敵意」に相当)の方が信頼性、妥当性、共に高くなっていた (山崎他, 2001)。まだ発達途上の小学生の段階では、反動的攻撃の細分化が表出性・不表出性以上に細かく分けることが困難であったのと同様に、反動的攻撃と道具的攻撃の分離も困難である可能性が高い。ただし、成人の場合でも、犯罪者に限ってはあながち反動的攻撃による犯罪を犯した者はほとんど必ず反動的攻撃による犯罪も犯しており (Cornell, Warren, Hawk, Stafford, Oram, & Pine, 1996)、非常に高い攻撃性をもつ者は発達段階の進行に伴う攻撃性のいくつかの側面の分化が進んで行かないという可能性もある。

こう考えると、小学生の段階で反動的攻撃と道具的攻撃を実際に測定した場合、両者にかかなり大きな重なりが出てくることはどうしても避けられないことになる。ここで、重なりをつくる主要な要素は、道具的攻撃に含まれる反動的表出性攻撃の要素である。自分の目的を達成するために力づくで何かをしたり、他人を痛い目に遭わせたりする場合のこれらの行動自体はカットとなった時にも実行される行動であろう。つまり、これまでの道具的攻撃に関する研究では「自分の目的を達成するために攻撃を使う」という、道具的攻撃の中でも実際に相手に被害を与える行動面が強調された攻撃、つまり、反動的表出性攻撃の身体的攻撃に近い部分に注目して研究が進められてきたものと思われ、これは歴史的に、実際に暴力を使うタイプの攻撃性が高いとされる男子が主な攻撃性研究の対象とされてきた (Crick, 1997) こととも無縁ではないだろう。

このように、実際には反動的攻撃と道具的攻撃にはかなりの共通部分があるにもかかわらず、その概念の有用性から、両者の弁別が完全にはなされないまま研

究が進んできた。しかし学校現場で小学生の生活を考え、その後の介入などを考えた場合、反応的な要素をあまり含まない道具的攻撃を反応的攻撃とはっきりと対比させて調べる研究も今後は必要になると思われる。

そのためには、目的を達するために攻撃を使うという道具的攻撃の概念に含まれる行動のうち、反応的攻撃に近い、暴力と関わる面を強調しないようにすることが1つの方法として考えられる。これまでの攻撃性研究で扱われた下位概念の中で、この条件にあてはまる種類の攻撃性としては関係性攻撃 (relational aggression) が挙げられる。関係性攻撃とは、女兒に特徴的とされる攻撃の型で、自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する行動であり、具体的な行動例としては、悪口を言ったり、仲間に入れなかったりすることで相手を社会的に排除したり、相手が嫌われるように仕向けること等が挙げられ (Crick, & Grotpeter, 1995)、そこには相手に直接向かう攻撃、力づくの暴力が存在しない。ただし、この場合、怒り感情 (つまり反応的な部分) を伴うことも、伴わないこともある (例えば、Crick, 1997の質問項目の中には、When madなど、反応的であることを示す表現が入っているものもある)。実際の研究例に怒り感情を含んでいる質問項目もあるため、これまで研究されてきた関係性攻撃に関する知見に反応的な要素がないとは言えないが、ここでは直接に暴力を介在させない「自分の目的を達するため」の攻撃であると考えて差し支えないだろう。なお、関係性攻撃と類似の攻撃性は社会的攻撃 (Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Gariépy, 1988)、間接的攻撃 (Lagerspetz, Björkqvist, & Peltonen, 1988) の名のもとでも研究されてきている。

また、他人の人間関係を操作するためには冷静に自分のとるべき行動や、他者の人間関係を評価する必要があるが、これまでの道具的攻撃の研究に比べれば概念的にも反応的な要素は少なくなるだろう。実際、関係性攻撃と顕在性攻撃 (overt aggression) との相関は  $r=.54$  (Crick, & Grotpeter, 1995)、 $r=.57$  (Grotpeter, & Crick, 1996) と、中程度の相関となっており、同じ攻

撃性という概念の違った側面を測っている場合にふさわしい値となっている (Crick, 1997)。なお、ここの顕在性攻撃とは反応的表出性攻撃と同義と考えられる (山崎, 2002)。

以上より、本研究では、基本的に関係性攻撃で道具的攻撃を代表させることとする。

### 細分化された攻撃性の形成過程

攻撃性の形成について考える場合も、攻撃性を大きくひとまとめにするのではなく、細分化する視点が必要である。その際には、上で述べた、攻撃性を大きく反応的攻撃および道具的攻撃に、さらに反応的攻撃を表出性攻撃と不表出性攻撃に分け、道具的攻撃を関係性攻撃で代表させる分け方が妥当であろう。これら3つの攻撃性 (反応的表出性攻撃・反応的不表出性攻撃・道具的關係性攻撃) は、それぞれ、異なる発達過程をもつと考えられる。まず、反応的攻撃は生得的要素が強く (Berkowitz, 1993)、それに対して、道具的攻撃は獲得的要素が強いと考えられている (Bandura, 1983)。さらに、後述する理由により、反応的攻撃の中でも、表出性攻撃の方が不表出性攻撃より生得的要素が強く、不表出性攻撃の方が表出性攻撃より獲得的要素が強いと考えられる。そのため、反応的表出性攻撃が最も早い発達段階で発現し、道具的關係性攻撃が最も遅く発現すると考えられ、その中間のどこかに反応的不表出性攻撃が位置すると推測される。

例えば、他児とのやりとりにおける攻撃の発達の変化に関して、八島 (2002) は以下のようにまとめている。生後12カ月から、ものを介しての取り合いが始まり、これは生後30カ月にかけて減少していく (Mueller & Brenner, 1977)。それがやがて言語的攻撃へシフトしていき、生後24~48カ月では言語的攻撃が増加する (Cairns, 1979)。児童期に入ると、攻撃性全体の低下がおこるがその中でも一部の児童が攻撃性が高いままに留まり、これが学校現場での問題となる。また、Rys & Bear (1997) はBjörkqvistらの研究 (Björkqvist, 1994; Björkqvist, Lagerspez, & Kaukiainen, 1992; Björkqvist, Österman, & Kaukiainen, 1992;

Lagerspetz, et al., 1988) をまとめ、8～18歳で多用される攻撃性の種類は身体的攻撃、直接的言語的攻撃、間接的攻撃の順に推移する、としている。ここでの、間接的攻撃とは関係性攻撃とほぼ同義であるとされ、反応的表出性攻撃がまず発現し、その後道具の関係性攻撃が発現する様子がかがえる。

反応的表出性攻撃の生得性、つまり遺伝性の高さの度合いについては、例えば、親評定による児童用行動チェックリスト (Child Behavior Check List) の攻撃性の相関は、3～7歳の一卵生双生児で.78、二卵性双生児では.31 (Ghodsian-Carpey, & Baker, 1987) ということから、この攻撃性に関しては、生得的な要素がかなり強いことがうかがえる。また、乳児期の気質 (否定的な感情を頻繁に強烈に表出、怒りっぽく騒ぎ立てる) が幼児期の攻撃の予測因になることも分かっている (Bates et al., 1991)。ただし、反応的表出性攻撃といえどもその生得的要素は50%程度で、獲得的要素が否定されるものではない。

反応的不表出性攻撃に関しては発達の研究がこれまでほとんどなされてきていないため、はっきりしたことは言えないが、例えば、Cook-Medleyの敵意尺度で測った成人の敵意性の遺伝要因は外向性神経症傾向などより高く (Smith, McGonigle, Turner, Ford, & Slattery, 1991)、反応的不表出性攻撃も生得的な要素が強いことが予測される。これは、この攻撃が表出性攻撃と同様に怒り感情をベースにしていることから予想できる結果である。ただ、生得的要素と共に、発達の過程で、素直に怒り感情を表に出せない経験をしているうちにこういう性格傾向が獲得されていく、という学習経験の影響も考えられる。では、どのように獲得されていくかであるが、恐らく母親を含む第1養育者とのやりとりが最初の機会であり、養育者との1対1のやりとりで表出性攻撃に対するネガティブな反応を受け続けることにより、表出を抑制することが学習され、その抑制が敵意につながっていくのだろう。このように考えていくと、表出性攻撃→不表出性攻撃→関係性攻撃の発現順の予測もあながち的はずれではないだろう。

最後に道具の関係性攻撃に関してであるが、このような攻撃行動は社会的な関係が存在する状況に置かれないと出現し得ず、家庭内ではおそらく出現しないだろう。なぜなら成員間の関係が近すぎる上に操作する対象はたぶん親などの成人や年長の同胞になるはずで、乳幼児が成人や年長児の認知能力に太刀打ちできるはずがない。したがって、この攻撃性の発現には何らかの社会的集団への参入を待たねばなるまい。つまり、表出性攻撃、不表出性攻撃、関係性攻撃の中では、この関係性攻撃が一番最後に発現すると考えられる。ただし、関係性攻撃も、遅くとも幼稚園段階では発現することが分かっている (Crick, Casas & Mosher, 1997; 磯部・佐藤, 2003)。

道具の関係性攻撃が、社会的に学習され、発現が遅いということは、この攻撃を実行するためにはある程度の認知能力が必要ということになる。同じ年齢なら、道具の関係性攻撃児が最も社会的認知的能力が高く、反応的表出性攻撃児が最も低く、反応的不表出性攻撃児は、他の2つの攻撃児の中間に位置すると推測できる。例えば、関係性攻撃的な行動が「いじめ」に多用されている (濱口, 2002; 森田, 2001; Olweus, 1991) と考えると、いじめっ子はそうでない子より社会的認知が高いという結果 (Sutton, Smith, & Swettenham, 1999) から、関係性攻撃児は社会的認知的能力が高く、表出性攻撃児や不表出性攻撃児に比べても、最も社会的認知能力が高い可能性も示唆される。

## 引用文献

- Antonovski, A. 1990 Personality and health: Testing the sense of coherence model. In H.S. Friedman (Ed.), *Personality and disease* (pp.155-177). New York: Wiley.
- Bandura, A. 1983 Psychological mechanisms of aggression. In R. Green & E. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*, Vol. 1. *Theoretical and methodological issues* (pp.1-40). New York: Academic Press.
- Barefoot, J.C., Dahlstrom, W.G., & Williams, R.B. 1983 Hostility, CHD incidence, and total mortality: A 25-year follow-up study of 255 physicians. *Psychosomatic Medicine*, 45, 59-63.
- Bates, J. E., Bayles, K., Bennett, D. S., Ridge, B., & Brown, M. M. 1991 Origins of externalizing behavior problems at eight

- years of age. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp. 93-120).
- Bendig, A.W. 1962 Factor analytic scales of covert and overt hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 26, 200.
- Berkowitz, L. 1993 *Aggression: Its causes, consequences and control*. New York: Academic Press.
- Björkqvist, K. 1994 Sex differences in physical, verbal, and indirect aggression: a review of recent research. *Sex Roles*, 30, 177-188.
- Björkqvist, K., Lagerspetz, K.M.J., & Kaukiainen, A. 1992 Do girls manipulate and boys fight? *Aggressive Behavior*, 18, 117-127.
- Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. 1992 The development of direct and indirect aggressive strategies in males and females. In K. Björkqvist & P. Niemela (Eds.), *Of mice and women: Aspects of female aggression* (pp.51-64). San Diego, CA: Academic.
- Bushman, B.J., Cooper, H.M., & Lemke, K.M. 1991 Meta-analysis of factor analyses: An illustration using the Buss-Durkee Hostility Inventory. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 344-349.
- Buss, A.H., & Durkee, A. 1957 An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 343-349.
- Cairns, R.B. 1979 *Social development: The origins and plasticity of interchanges*. San Francisco: Freeman.
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Gest, S. D., & Gariépy, J.-L. 1988 Social networks and aggressive behavior: Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, 24, 815-823.
- Cornell, D. G., Warren, J., Hawk, G., Stafford, E., Oram, G., & Pine, D. 1996 Psychopathy in instrumental and reactive violent offenders. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 783-790.
- Crick, N.R. 1997 Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression. *Developmental Psychology*, 63, 1305-1320.
- Crick, N.R., Casas, J.F., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, 33, 579-588.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1996 Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, 67, 401-413.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 67, 993-1002.
- Dodge, K.A., & Coie, J.D. 1987 Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 710-722.
- Ghodsian-Carpey, J., & Baker, L.A. 1987 Genetic and environmental influence in aggression in 4- to 7-year-old twins. *Aggressive Behavior*, 13, 173-186.
- Grotpeter, J.K., & Crick, N.R. 1996 Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, 67, 2328-2338.
- 濱口佳和 2002 学校における問題・不適応行動と攻撃性, 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編— (pp.168-181) ナカニシヤ出版
- 磯部美良・佐藤正二 2003 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21.
- Lagerspetz, K.M.J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. 1988 Is indirect aggression typical of females? Gender differences in aggressiveness in 11- to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, 14, 403-414.
- 森田洋司 (監修) 2001 いじめの国際比較研究—日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析— 金子書房
- Mueller, E., & Brenner, J. 1977 The origins of social skills and interaction among playground toddlers. *Child Development*, 48, 854-861.
- Olweus, D. 1991 Bully/victim problems among schoolchildren: Basic facts and effects of a school based intervention program. In D.J. Pepler & K.H. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp.411-448). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum
- Poulin, F., & Boivin, M. 2000 Reactive and proactive aggression: Evidence of a two-factor model. *Psychological assessment*, 12, 115-122.
- Price, J., & Dodge, K. A. 1989 Reactive and proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 17, 455-471.
- Quiggle, N. L., Garber, J., Panak, W. F., & Dodge, K. A. 1992 Social information processing in aggressive and depressed children. *Child Development*, 33, 579-588.
- Rys, G.S., & Bear, G.G. 1997 Relational aggression and peer relations: Gender and developmental issues. *Merrill-Palmer Quarterly*, 43, 87-106.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 2000 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究, 42, 423-433.

- 仙谷真弓 2002 攻撃性の表出と子どもの心身の健康 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編—(pp.168-181) ナカニシヤ出版
- Smith, T.W., McGonigle, M., Turner, C.W., Ford, M.H., & Slattery, M.L. 1991 Cynical hostility in adult male twins. *Psychosomatic Medicine*, 53, 684-692.
- Sutton, J., Smith, P.K., & Swettenham, J. 1999 Social cognition and bullying: social inadequacy or skilled manipulation? *British Journal of Developmental Psychology*, 17, 435-450.
- Vitaro, F., Gendreau, P.L., Tremblay, R.E., & Oligny, P. 1998 Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 377-385.
- 山崎勝之 2002 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編—(pp.19-37) ナカニシヤ出版
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 2001 小学生用攻撃性質問紙(HAQ-C)の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編), 16, 1-10.
- 八島美菜子 2002 攻撃性と発達 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編—(pp.60-80) ナカニシヤ出版